

76 人工内耳患者の語音聴取能聴取能に影響を及ぼす要因（主に心理的变化について）

（耳鼻咽喉科学）湯川久美子、城間将江、
船坂宗太郎
（精神医学）川浪淑子、近藤雅則

人工内耳により言葉のコミュニケーションを再獲得する事が、聾患者に与える心理的影響は多大なものがある。今回我々は、人工内耳患者にY-G検査を手術前後に行い、患者の心理変化および術後語音聴取能との関係について報告した。

対象と方法 人工内耳装用患者12名に対し、1. 術前および術後6 カ月～5 年目にY-G検査を施行し、前後の変化を比較。2. 術後3 カ月目以降にビデオによる文の聴取能検査を施行し、Y-G検査尺度の変化との関連を検討した。

結果 1. 12の性格特性について12人のスコアの平均値を術前後で比較したところ、D抑うつに関してのみ、術前後で有意の差を認めた。他の特性では、N神経質、O主観的、Rのんき、で術前に比べ術後にスコアが高くなる傾向があった。2. 術前の性格プロフィールは、術後 12 例中8例で変化した。3. 術後のプロフィールの変化した症例と、不変であった症例について、各特性の術前のスコアを比較したところ、術後変化した群で、気分の変化と、劣等感のスコアが有意に高かった。4. 術後の言語聴取能の良し悪しと、術前の性格との関係を8例について調べたところ、術前の性格特性のうち神経質のみが、文の聴取能の悪さに影響した。

考察 音のない世界から音の世界へ復帰はしたものの、健聴者と同様のコミュニケーションは不可能であり、人工内耳の可能性と限界を感じた時、どんな人でも多少、抑うつ的になることは理解できる。また、聞き取りにはかなり神経を使うため、些細なことに気を奪われ易く、集中力を欠く神経質な人が、術後の言語聴取能が不良であることも、当然の結果と言えるであろう。手術患者の決定や、術後のリハビリテーションを行う際に、その様な患者の心理状態を良く考慮にいたした上で行うことが大切である。今後は定期的な検査により、経時的な心理変化を観察する必要がある。